

東京の文化財

東京都教育庁地域教育支援部管理課

目次

- 三河島污水処分場唧筒場施設……………1・2・3
- わがまちの文化財……………5
- わがまちの文化財(羽村市)……………4
- 東京都埋蔵文化財センターの行事案内……………6

きゅう み かわ しま お すい しょ ぶん じょう ポ ンプ じょう し せつ

旧三河島污水処分場唧筒場施設

下水道は都市の基盤

みなさんは、荒川区荒川にある三河島水再生センター（東京都下水道局）を知っていますか？三河島水再生センターでは、わたしたちが生活や産業のために使った水や雨水を集め、ゴミや化学物質を除いてきれいにした水を、隅田川に放流しています。

もし水再生センターがなかったら、わたしたちの生活はどうなっていたでしょう？

例えば19世紀初めのヨーロッパの都市では、上水道も下水道も不十分なままに急激に人口が増加したため、汚物・汚水は町中に散らばり、飲み水も清潔ではなかったといえます。そのため、ひとたび伝染病が発生すると被害は大きく、多数の人々が犠牲になりました。

明治の始め頃のヨーロッパは、こうした状況を改善しようと下水道が整備されている最中でした。そのころヨーロッパに留学した日本の技術者たちは、こうした状況に接し、下水道の整備は、多くの人が生活する都市の基盤造りとして不可欠だと理解したのです。

とくに明治5年(1872)の岩倉遣欧使節団に同行した長興専齋ながよ せんさいは、国民の健康という視点から、のちに内務省初代衛生局長として近代下水道の導入に努めました。

わが国最初の近代下水処理場 —三河島污水処分場—

ところで江戸時代の“江戸”は100万都市といわれ、世界的にみても大変に人口の多い町でした。それでもヨーロッパの都市のような問題が起らなかったのは、町のすぐ外に農村が広がっていたからでした。糞尿などの汚物は、江戸町人が食べる野菜をつくるのに必要な肥料として回収され、リサイクルされていました。

しかし近代化の中で、人口は増加して住宅地や工場は多くなり、逆に農村は減ってゆくと、汚物・汚水の処理は深刻な問題となると予測されていました。実際、明治時代にも幾度か伝染病が流行しています。

そこで早くも明治22年(1889)には、東京帝国大学の初代衛生工学専任教授で内務省技師でもあった英国人W・K. バルトンらにより、わが国初の本格的な下水処理計画が東京市区改正委員会に提出されています。この計画は財政的な問題もあり実現しませんでした。東京市街を3区域に分け各々に処分場を建設することと、候補地として三河島から処理水を隅田川に放流することが既に提案されていました。

明治40年(1907)、バルトンの跡を継いで東京帝国大学教授となり東京市技師長でもあった中島鋭治を中心に、計画が練り直されます。実際には